

抄 録

第72回日本泌尿器科学会群馬地方会演題抄録

日 時：平成 28 年 2 月 13 日 (土) 15 時 00～
 場 所：群馬大学医学部刀城会館
 会 長：小林 幹男 (伊勢崎市民病院)
 事務局：柴田 康博 (群馬大院・医・泌尿器科学)

〈セッション I〉

座長：栗原 聡太 (群馬大院・医・泌尿器科学)

臨床症例

1. 尿道腎原性化生の 1 例

演 野 達也, 井上 雅晴
 (高崎総合医療センター)
 渡邊 晃秀, 李 哲洙, 栗田 晋
 (立川相互病院)

症例は 58 歳男性。肉眼的血尿を主訴に近医受診。膀胱鏡で膀胱腫瘍を指摘され当科紹介となった。当科での膀胱鏡では右尿管口外側に乳頭状腫瘍を認めた。また PSA44.072 ng/ml と高値であった。TURBT と前立腺生検を施行。術中の所見で精阜の両脇に乳頭状粘膜があり生検を行った。病理診断は膀胱腫瘍が Non-invasive papillary UC, low grade, pTa, 尿道は腎原性化生の診断であった。また前立腺には悪性所見を認めなかった。腎原性化生は尿路上皮に発生する比較的にまれな良性腫瘍であり尿細管に類似した円柱ないし立方上皮が乳頭状に増殖する病態である。今回我々は尿道に発生した腎原性化生を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

2. 腹腔鏡補助下に摘出した副腎癌の一例

土肥 光希, 大津 晃, 中嶋 仁
 牧野 武朗, 悦永 徹, 斉藤 佳隆
 竹澤 豊, 小林 幹男
 (伊勢崎市民病院 泌尿器科)
 中澤 信博, 鈴木 秀樹 (同 外科)

77 歳女性。前医で尿潜血の精査中にエコー・CT で 10 cm 大の右副腎腫瘍を指摘され、当科紹介受診。内分泌学的異常は認めず、明らかな浸潤・リンパ節転移・遠隔転移を認めないため、非機能性副腎癌 cT2N0M0 と診断。まず、後腹膜到達法で腫瘍周囲を剝離し、経腹膜到達法で肝下面・下大静脈周囲を可及的に剝離し、副腎静脈を処理した。その後開腹・開胸で副腎摘出術を行った。手術時間は 8 時間 59 分、

出血量は 1,840 ml であった。病理学的には副腎皮質癌であり、周囲被膜への浸潤を否定できず pT3N0M0 と診断した。副腎腫瘍では、腹腔鏡手術の適応は 12 cm 以下の良性腫瘍とされているが、最近は周囲への浸潤やリンパ節転移を認めない悪性腫瘍にも適応が拡大される傾向にある。特に径 6 cm を超える大径の副腎腫瘍では、腫瘍血管の発達が顕著であることや、下大静脈との癒着を認めることがあり、後腹膜到達法が適しているという報告もある。手術動画を供覧し、若干の文献的考察を交えて報告する。

3. 精巣カルチノイド腫瘍の一例

根井 翼, 村松 和道, 蓮見 勝
 清水 信明
 (群馬県立がんセンター 泌尿器科)

症例は 16 歳男性、左精巣腫瘍。腫瘍マーカーは基準値内であり、CT で傍大動脈リンパ節の腫脹を認め、転移を疑われた。20XX 年 8 月、前医で左高位精巣摘除を施行した。腫瘍径は 6 cm、病理より奇形腫を伴うカルチノイドの診断となった。9 月、追加治療目的に当院へ紹介となった。追加検査では尿中 5-HIAA 10.3 と高値を認め、PET-CT で傍大動脈リンパ節と鼠径部リンパ節に高集積を認めた。10 月に後腹膜リンパ節郭清を施行し、転移を疑う二つのリンパ節を摘出した。病理は傍大動脈リンパ節がカルチノイド、鼠径部リンパ節からは癌なしとの結果であった。精巣原発のカルチノイドは全カルチノイドの 1%未満とまれな疾患であり、特にリンパ節転移をきたした症例は少なく、予後因子の決定や治療法の確立には症例の蓄積が求められる。

4. 陰茎折症の 2 例

大津 晃, 中嶋 仁, 村松 和道
 牧野 武朗, 悦永 徹, 斉藤 佳隆
 竹澤 豊, 小林 幹男
 (伊勢崎市民病院 泌尿器科)
 宮尾 武士 (群馬大院・医・泌尿器科学)

【症例 1】 55 歳男性。2015 年某日、16 時に受傷。性交渉中に「ポキッ」という音を認め、その後陰茎右側中央部に疼痛、血腫が出現。同日 18 時に来院した。来院時陰茎右側中央部